

学位論文審査報告書

氏 名： 内田 准心
学位の種類： 博士（文学）
論文題目： 曇鸞浄土教の研究 ―同時代的視野からみた実践と思想―

I 前言

内田准心氏が提出した学位請求論文「曇鸞浄土教の研究 ―同時代的視野からみた実践と思想―」について、審査の結果を報告する。

本論文が研究対象とする、中国の南北朝時代末期の僧である曇鸞(476～542)は、仏教史の展開において、いわゆる「浄土教」(浄土仏教)を確立し、かつまた自身も実践した僧として知られており、後の道綽や善導の浄土教および日本浄土教、特に親鸞の浄土教に大きな影響を与えている。

従来の研究は、世親(天親)の『無量寿経優婆提舍願生偈』(「浄土論」と呼ばれている)を註釈した『無量寿経優婆提舍願生偈註』(「往生論註」あるいは「浄土論註」と呼ばれている)を中心に行われ、特に真宗学の分野においては、親鸞に至る浄土教理史という流れを前提に曇鸞の教学の研究はすすめられてきた。

ところが昨今、旧来の研究方法を批判的に反省し、それに縛られないという方法での研究が進展してきており、内田准心氏の本論文は、これらの研究成果を視野に入れつつ、先行する研究の問題点をふまえながら、曇鸞浄土教を明らかにしようとするものである。本論文は、取り扱う文献を、

- (1)インド・西域由来の文献
- (2)曇鸞と同時代の中国の仏教者(インド・西域出身の僧侶も含む)の手による文献
- (3)曇鸞没後に著された中国仏教者の文献

という三種類に分類し、中国の同時代の僧侶たちと比較した場合に曇鸞が独特の思想を持っていること、あるいは曇鸞と同時代の僧侶たちの思想と実践には不明な点が多いこと等の課題に対して、南北朝の時代という「時代性」、および中国の華北から山西地域という「地域性」を帯びた、生きた仏教として、曇鸞の思想と実践を明らかにしようとするものである。

論文は内容的に大きく二つの構成になっているといえるが、その一つは、曇鸞当時の中国社会の状況を視野に入れながら、曇鸞の伝記に関する資料を再検討し、従来より正確な歴史的曇鸞像を提示して、曇鸞と関係の深い思想や実践を洗い出すこと、二つにはそれらによって浮かび上がる種々の思想や実践と、曇鸞の著作内容とを比較対照して両者の関係を明らかにすること、という構成で述べられている研究である。

本論文は、A5判、本文が1頁が47字×15行の321頁(400字詰換算で実質約520枚、註を含む)で生まれ、最初に目次(5頁)、巻末に参考文献(17頁)が付されているという体裁である。真宗学の中では、浄土教理史の分野の研究となる。

II 目次

本論の目次は以下の通りである。

序論

- 一、先行研究の問題点
- 二、本研究の方法と概略

第一章 曇鸞の生涯の再検討

はじめに

第一節 曇鸞伝の基礎的考察

- 第一項 『統高僧伝』「曇鸞伝」の概略
 - 第二項 「曇鸞伝」にみる思想背景の概略
- ### 第二節 帰浄以前の思想的素養

第二節 帰浄以前の思想的素養

- 第一項 五台山仏教
- 第二項 四論・仏性
- 第三項 『大集経』
- 第四項 道教的長生法

第三節 浄土思想との接点

- 第一項 回心に関する従来の説
- 第二項 『観経』の普及状況
- 第三項 六大徳の浄土信仰

おわりに

第二章 曇鸞と北朝社会

はじめに

第一節 曇鸞と国家との関係

- 第一項 曇鸞に対する皇帝の帰依
- 第二項 曇鸞が皇帝の帰依を受けた原因

第二節 曇鸞と北魏・東魏仏教界における国家権力との関係

- 第一項 北魏・東魏仏教界の皇帝観
- 第二項 曇鸞の著述にみえる皇帝観
- 第三項 北魏・東魏仏教界における僧官制度の功罪
- 第四項 『論註』にみえる権力闘争への意識

第三節 『論註』の社会認識と本願観

- 第一項 『論註』上巻の莊嚴相解釈の構造
- 第二項 『論註』の願文の特異性—曇鸞の社会認識—

おわりに

第三章 曇鸞と同時代の実践との関係

はじめに

第一節 八番問答における願生と滅罪

第一項 八番問答における願生

第二項 僧稠らの『観経』解釈と曇鸞の十念往生説

第二節 五念門における願生

第一項 礼拝門における願生

第二項 讚嘆門・作願門・観察門における願生

第三節 『論註』における階位の超越—南岳慧思との比較を通して—

第一項 『浄土論』と『十住毘婆沙論』「易行品」における「速」

第二項 『論註』における「速」

第三項 速疾成仏をめぐる論争

おわりに

第四章 曇鸞と同時代の諸思想との関係

はじめに

第一節 『論註』における総相・別相—地論宗の六相との関係から—

第一項 『論註』における総相・別相

第二項 地論宗における総相・別相

第三項 『論註』における願生偈の位置づけ

第二節 『論註』と『大乘起信論』の「専意念仏説」

第一項 難易二道説をめぐる問題

第二項 『起信論』の「専意念仏説」

第三項 『論註』と「易行品」と「専意念仏説」

第三節 曇鸞における龍樹崇拝

第一項 道場・慧海・道詮の浄土信仰

第二項 曇鸞における龍樹崇拝

おわりに

結論

III 論文の要旨

序論

序論は、本研究の方法や手続きについて述べ、近年の研究の動向をふまえて、本論の問題意識と目的が述べられる。

曇鸞の思想背景の研究は、これまでインド由来の龍樹を中心とする中観系の思想、世

親を中心とする唯識系の思想による影響、もしくは中国の鳩摩羅什やその門下、とくに僧肇の思想による影響を考察して行われたものが多いが、これら上記の祖師たちの影響からのみで曇鸞の思想を語ることに問題がないわけではないとし、たとえば、龍樹、世親はやはり時代的、地域的に曇鸞とは距離があるわけであり、鳩摩羅什、僧肇にしても、時代的に曇鸞とはおよそ百年の隔たりがあつて、とりまく社会や仏教界の状況も大きく異なるといわねばならないとする。

これに対し氏は、近年において、曇鸞の生きた北朝期の仏教研究が活況を呈し、それらは、敦煌出土の文献などに基づく地論宗の研究、造像銘などにより明らかとなる当時の地域社会における民衆の信仰の研究、あるいは僧伝なども含めた多様な文献から当時の仏教者の状況を探る研究などに代表されるが、これらの研究は、北朝仏教を隋唐仏教へのつなぎとしてみるのではなく、北朝仏教自体の思想と実践とを凝視するという手法が意識的に採られていると見ている。

そして氏は、曇鸞研究の場合も同様に、時代性、地域性を考慮した同時代的視野をもってその思想と実践をみることで、新たな曇鸞像がみえてくるものと思われるとし、これまでも、同時代的視野において曇鸞研究が志向されたこともあるのではあるが、資料の不足や、仏教界における曇鸞自身の位置が不明確なことなどにより、満足な成果は得られているとは言い難いとする。

そこで、本論文では、北朝仏教研究の成果に広く目を配り、多様な文献を取り扱うことで、曇鸞の周囲の、思想や実践の状況をできる限り把握し、その成果をもとに同時代的視野から、曇鸞の思想と実践を明らかにしようというのが本論の目的であるという旨を述べられる。

第一章 曇鸞の生涯の再検討

第一章は、『続高僧伝』の「曇鸞伝」の内容を詳細に検討した上で、北魏・東魏の仏教界において曇鸞が思想的にどのような位置にあつたのかという問題を中心に、曇鸞の生涯について考察する。

第一節では、『続高僧伝』「曇鸞伝」の資料的性格を藤善真澄氏の研究に依拠しつつ確認し、曇鸞の事跡を示す資料の内、『続高僧伝』「曇鸞伝」の信憑性が最も高いということを示される。

第二節では、帰浄(浄土門帰入)以前の曇鸞の思想的素養を検討する。従来、『続高僧伝』や『魏書』「釈老志」などによって、曇鸞伝において「北魏仏教の中心的思潮である羅什系統の般若思想を学んだ」などと簡単にまとめられることも少なくなかった。

しかし本論では、当時は、地論宗の台頭などにより、羅什系統の般若思想から、唯識思想や如来蔵思想を受けた縁起思想へと仏教界の中心的思潮が変遷しつつあり、それは曇鸞の出家の地である五台山も例外ではなかったという状況をふまえて、曇鸞が羅什系統の思想の影響を受けていることは論を俟たないが、その思想的素養から、決して仏教界の中心的位置にあつたとは言えないということを指摘している。

また、ここで曇鸞が『大集経』や道教的長生法に興味を持っていたことは、北朝の仏教者としてはごく一般的なことであり、曇鸞思想の多様な面の一つとして考慮されるべ

きことを指摘している。

第三節では、「曇鸞伝」にみえる回心の逸話を手がかりに、曇鸞と浄土思想との接点がどこにあったのかが検討される。

従来、曇鸞の回心の逸話は史実としては信憑性が低いとみられていた。しかし、『安楽集』に示される曇鸞を含む「浄土の六大徳」の僧侶たちが菩提流支と関わりが深いことや、当時『観経』も既にある程度普及していたと考えられることを考慮すれば、あながちに曇鸞の回心の記事が作り話とはいえ、特に、「菩提流支から『観経』を授かった」という部分は、曇鸞の中国仏教界における思想的な立ち位置を反映している可能性が高いということを論じている。

氏は、この第一章で得られた知見をもとに、次章以降において、同時代の社会状況、思想潮流と曇鸞の思想との関係を明らかにすることで、曇鸞思想の特徴について考察していくのである。

第二章 曇鸞と北朝社会

第二章は、当時のきわめて不安定な社会状況の中で、曇鸞は当時の国家といかに関係し、社会をどのように捉えていたのか、その社会認識によって曇鸞の思想はどのように展開していったのかについて、特に『論註』上巻の観察門積に注目して考察する。

まず第一節および第二節においては、曇鸞に対する皇帝の帰依を確認し、『論註』に見える国家権力に対する認識を、世俗権力と仏教界が密接な関係にある当時の状況を踏まえつつ検討する。

すなわち、『論註』の国家に関する認識を見る上で重要なのは、上巻の観察門積であるとして、そこには浄土の清浄なあり方とは対照的な此土の迷いのあり方が示されているが、その中に君主が入れ替わることによって不安定な世相がもたらされること、生れ出した環境によって思うような社会的地位が得られないことといった権力をめぐる衆生の苦しみが生々しく描かれているところを見出すことができるとする。

また一方で、「浄土の君主」として阿弥陀仏を位置づけることなどによって、此土とは対照的な浄土の平等性が明らかに強調され、そのような浄土を建立した阿弥陀仏の慈悲が示されていることが述べられる。そして伝記によれば、曇鸞には皇帝も帰依したといわれるように、曇鸞と国家とは浅からざる関係を持った僧侶と考えられるが、国家権力の持つ危険性は鋭敏に感じ取っており、当時の人々を悩ませた権力をめぐる苦悩からの解放を阿弥陀仏の浄土に見出したということができるとする。

そして第三節では、上述の観察門積の全体について論じられる。そこではまず、「此土には様々な苦悩が広がっている現実があるので、法蔵菩薩はそのような苦悩が存在しない浄土のあり方を願い、それが『浄土論』の莊嚴相となった」という枠組みをもって註釈が施されていると述べ、さらに此土の様子を描写する箇所では、身分制社会の自由を奪う桎梏や、前節までにみた国家権力がもたらす不平等な社会のあり様などといった当時の北魏社会が抱える問題点が鮮明に表されていると見る。そして曇鸞は、『無量寿経』などにはない独自の願文を作成することにより、その問題を超越する阿弥陀仏の浄土の様相を示していたとし、中でも、此土の不平等性と浄土の平等性に並々ならぬ関心を寄せ

ていることが見てとれるという。

氏は、曇鸞がこのような註釈を行った背景には、阿弥陀仏の本願が、今この北魏社会を生きる自分自身と人々のために現にはたらいっており、『浄土論』に記される浄土の莊嚴相は、自身と人々の苦悩を解放するはずだという確信があったと考えられるとする。

第三章 曇鸞と同時代の実践との関係

第三章では、当時行われていた様々な仏道実践と曇鸞の行った実践との関係について論じ、曇鸞の実践の特徴について考察される。

第一節、第二節では、『論註』に出る五念門・十念という二つの往生行に通底する「願生」という概念について考察し、ここでいう願生とは、阿弥陀仏の浄土に対象を絞ってそこへの往生を願うことであるとされていること、そしてこの「願生」という概念は、同時代の他の仏道実践と曇鸞自身の実践とを区別するために、自身の実践の旗印として用いられたものであったと考えられることを述べる。

そして、そもそも『浄土論』にも願生は重んじられる概念ではあるものの、『論註』はそれを阿弥陀仏の浄土への願生という義をより推し進めて明瞭に表現していることで、曇鸞の住む山西省で流行していた「多仏に礼拝称名し懺悔する」実践や、僧稠などの著名な僧が実践していた「四念処」などの観法との差別化を図っていったと考えられると述べられる。また『論註』下巻の起観生信章における五念門の釈において、曇鸞は五念門の一々の行の内容を述べるが、それぞれの後半部分において、「〇〇のような行ではない」というような否定的表現で、当時行われていた他の仏道実践をひきあいに出しながら、五念門が正しい往生の行業であることを提示しているとも付言している。

第三節では、『論註』における階位超越の説について、南岳慧思の速疾成仏説と比較しつつ曇鸞の主張の特徴について論じられる。そして『論註』に示される階位の超越説と慧思の速疾成仏説とは、表現・内容ともによく似通っており、両者の間に思想交渉があった可能性を指摘できるとする。特に沈空の難に陥った際に、諸仏に見えることによつて第八地の無功用の位への頓入を目指す点において一致し、またそのような階位の超越説は一般には理解されにくいことを示す点においても一致していると述べる。実際に南岳慧思が迫害を受けたことに明らかなように、当時の仏教界では階位の超越説は受け入れがたい教説であったようであつて、一見不自然に思える『論註』における階位の超越に関する説きぶりは、そのような仏教界の状況に配慮したものであり、その上で、曇鸞は阿弥陀仏の本願力にもとづいた自身の成仏道を提示していったものと結んでいる。

第四章 曇鸞と同時代の諸思想との関係

第四章は、北朝仏教界の種々の思想、中でも地論宗と菩提流支周辺の思想をとりあげ、曇鸞の思想とはどのような関係にあつたのかについて、いくつかの視点から論じ、曇鸞の思想の独自性について考察するものである。

まず第一節は、『論註』において『浄土論』の国土の莊嚴を分類する際に用いられる総相・別相という概念について論じている。この莊嚴相の分類は、『浄土論』そのものの分

類法とは明確に相違するものであり、その依拠するところは従来明らかではなかった。しかし、本論文では近年の研究成果を依用しつつ、この分類方法が地論宗の「六相」という經典解釈方法ときわめて似通っているとし、『論註』の総相・別相の概念はその影響を受けて成立したものであったと考えられるとする。そしてこの地論宗の六相の用い方を踏まえると、『論註』がこの解釈法を『浄土論』の「願生偈」に適用していることは、曇鸞にとって「願生偈」が「經典」に近い存在として位置づけられており、『浄土論』の十七種莊嚴のすべてが「教」としての機能があると認識していたと考えられると述べる。

次に第二節では、望月信亨氏の研究による『大乘起信論』と『論註』の類似を指摘する論に着目し、『論註』の「難易二道」説、『起信論』の「專意念仏」説、そして『十住毘婆沙論』「易行品」の三つの教説を比較考察される。比較の結果、まず三者は、一般的な行を修めることが難しい者に対し、阿弥陀仏などを対象とした行によって速やかに不退に至るという道筋を示す点において同一であるとし、そして『論註』の「難易二道説」と『起信論』の「專意念仏説」は、先行する「易行品」を解釈する中において、①浄土不退の明示、②阿弥陀仏一仏への専一性の強化、③仏に見えることができない宗教的危機感による浄土への帰依、といった類似した説の展開を見せているとする。

さらに、近年の研究によれば『起信論』の「專意念仏説」は菩提流支周辺の浄土思想を伝えたものと思われ、『論註』の「難易二道説」は菩提流支周辺の浄土思想の影響によって形成されたものではないかという仮説を提示している。

そして第三節では、『安樂集』に「浄土の六大徳」として挙げられる道場と慧海、そしてその二人と関わりのある道詮の浄土信仰について検討し、曇鸞の浄土思想との関係を論じられる。三人の浄土信仰は、五通菩薩ゆかりの阿弥陀仏の画を実践に用い、『大智度論』を重んじていたこと、また道詮と曇鸞の場合には『楞伽經』「龍樹懸記」にもとづいて阿弥陀仏を信仰していた点に特徴があったことが述べられる。

注目されるのは、彼らの信仰が曇鸞と同様に、龍樹を重んじた浄土信仰であるという部分であるとして、そこで曇鸞における龍樹の位置づけを改めて検討して、『讚阿弥陀仏偈』における「龍樹懸記」の依用や、迦才『浄土論』の逸話などから、龍樹を、曇鸞自身を含めた衆生を浄土へ導く存在と見なし、その衆生の一人として自らも浄土に願生するという強い認識があったことを指摘しているところである。

このことは、曇鸞が世親を、阿弥陀仏の浄土に往生するよう自身にはたらきかける存在と見なししていたという殿内恒氏の指摘と軌を一にしている。また、三人の僧侶のうち、道場は菩提流支と関わりの深い人物であり、ここでもやはり曇鸞が菩提流支周辺の浄土教の影響を受けていることが想定されると考えられている。

結論

本論文の結論は、考察された各章の内容をまとめた上で以下のように結ばれる。

まず本研究によって、同時代的な視野において曇鸞の思想と実践を検討した結果、当時の社会状況や種々の仏道実践や思想が曇鸞に影響を与えていたことが、様々な観点から明らかとなったと述べる。

たとえば、きわめて不安定であった当時の社会状況や、流行していた禅定・懺悔・称

名などの仏道実践、地論宗の思想、菩提流支周辺に存在した浄土思想などの影響である。従来、曇鸞は仏教史の中で独立した存在のように位置づけられることも多かったが、上記の考察の結果、曇鸞の思想は決して時代の思潮と無関係に成立したものではなく、同時代の実践や思想の流れの中で成立していたことが明確となった。ただしこのことは、従来曇鸞の思想背景とされてきた、龍樹を中心とする中観系の思想、世親を中心とする唯識系の思想、もしくは、鳩摩羅什や僧肇の思想などの影響を否定するものではない。その双方の影響を受けつつ、曇鸞は「無仏の世、五濁の時」、言い換えれば、六世紀初め、中国において生きる自己と人々に適用可能な成仏道を形成していったと考えられている。

また、本研究のもう一つの成果は、曇鸞が同時代的な思想や実践や社会状況を意識しつつも、第三章を中心に述べたように、自身の仏道の根本には阿弥陀仏の本願力、他力があることを強く認識していたことが改めて確認されたことである。

たとえば『論註』は、当時の不安な社会状況を歎きつつも、それを超越する本願が当時の社会に確かにはたらいていることを説き、また当時流行していた仏道実践と自身の実践の相違の根本に、阿弥陀仏一仏の絶大な功德があることを強調していた。曇鸞の仏道の根本が、阿弥陀仏の本願力によるものであることはよく知られていることではある。しかし、それを同時代の社会や仏教の思潮の中に、阿弥陀仏の本願を位置づけて自説を展開していったということを明らかにした点に、本研究の意義があると述べているところである。

IV 審査委員会の評価

浄土教理史の分野では、曇鸞は現代に至る仏教の展開の歴史において、明瞭に「浄土」の概念を定め、いわゆる浄土仏教を確立した仏教者と位置づけられると言われるが、近年の研究以前は、多くは日本に至る浄土教、さらに言えば親鸞にまで相承された曇鸞という前提の上に行われていたと言える。

しかし、昨今の多角的な研究の新たな展開は、曇鸞研究に新たな視野を開いてきており、本研究もその流れの中に位置づけられるものである。特に北朝仏教の研究成果によりながら、曇鸞の周辺の思想や実践を明らかにし、それにもとづいて曇鸞と同時代の仏教界や社会の状況を視野に入れて、曇鸞自身の思想と仏道実践を明らかにしようとする本論文は、昨今の研究動向を広く網羅的に整理し、さらに研究を進展させようという意欲的な姿勢を見せている。

その第一章は、まず曇鸞伝を再検討して、羅什系の般若教学の影響を色濃く受けているが曇鸞は必ずしも仏教界の中心的位置にいたとは言えないこと、また『大集経』や道教的長生法への興味は当時としては特別なことではないこと、さらに曇鸞の回心の逸話について、近年の地論宗の研究の進展をふまえて、『安楽集』に説かれる「浄土の六大徳」の僧侶たちの状況や『観経』の普及状況を考慮し、それらが曇鸞と周囲の思想との関係を反映している可能性が高いと論じていること等、曇鸞の生涯について一定の新たな知見を提示していると評価できる。

第二章は、曇鸞と当時の国家や社会との関係を考察するものであったが、不安定な社会状況の中で、曇鸞が当時の国家といかに関係し、社会をどのように捉えていたのかに

ついで、『論註』における社会認識と当時の北魏社会が抱える問題点とが関係づけて考察されていた。

たとえば『論註』に、君主が入れ替わることによって不安定な世相になることや、権力をめぐる衆生の苦しみが生々しく記述されていること等は、当時の社会状況が直接的に関係していると見られたことや、此土とは対照的な浄土の平等性が強調されて、その浄土を建立した阿弥陀仏の慈悲が示されていることは、具体的な当時の衆生の苦悩からの解放を、阿弥陀仏の浄土に見出したものであると言えるとして、人々の中に生きる阿弥陀仏の本願という側面を指摘していることなどは、従来の研究にはなかった新たな社会的視点ではあると見られた。

さらに第三章では、曇鸞が、同時代に行われていた禅観・称名・懺悔等に関する信仰や仏道実践を意識し、それに対して自らの仏道実践の基盤に「願生」の概念を明瞭に、かつ強く表現していることによって、他の実践との差別化を図ったということ、五念門・十念という二つの行に共通する「願生」の概念を精査することによって明らかにしていることは注目される所ではあった。

ただここに、曇鸞が五念門のそれぞれの後半部分に、「○○のような行ではない」というような否定的表現をもって、当時行われていた他の仏道実践をひきあいに出しながら、五念門が正しい往生の行業であることを提示していると付言しているが、その論証は充分であるとは言い難いところであった。

またこの第三章では『論註』における階位の超越について考察し、それが南岳慧思の速疾成仏説との思想交渉によるものであるという可能性を指摘し、当時の仏教界の状況をふまえながら、『論註』が阿弥陀仏の本願力による超越的な成仏道を説いたのも、このような曇鸞の周囲の状況によるものであろうと論じられているが、このような見方もやや不十分ながら『論註』研究に新たな側面を開くものではあろう。

ただし審査委員会では、たとえば当時の中国仏教界には頓悟・漸悟の議論があったはずであり、曇鸞の速疾成仏説を考察する際に、その状況を論じていないのは不備ではないかという意見も出された。

また本論の第四章は、曇鸞と同時代の北朝仏教界の諸思想との関係を論じたもので、その第一節は、『論註』では、国土の莊嚴相を総相・別相という概念で分類するが、これが地論宗の「六相」という経典解釈方法の影響を受けてのもであったことを明らかにすることによって、曇鸞が『浄土論』の「願生偈」を「経典」に近い位置づけをしているという見解が示されるものであるが、これについて、審査委員会では、総相・別相という概念は仏教の教学において一般的に用いられる概念であろうし、また地論宗の「六相」を経典解釈の方法と言って良いのであるかということ、さらに地論宗は教相判釈（教判）を重視するはずであるが、その教判について述べられていないのは考察が不十分なのではないか等という意見が出された。このような問題について、一応の氏の一応の回答は得られたが、地論宗等に関するより総合的な知識・考察が求められるところであろう。

第四章第二節は『論註』の難易二道説と『大乘起信論』の「専意念仏説」そして「易行品」の三つの教説を比較考察し、『論註』の二道説が菩提流支周辺の浄土教思想の影響によって形成されたのではないかという推論を述べ、さらに第三節では『安樂集』に「浄土の六大徳」としてあげられる僧侶の浄土信仰を考察し、曇鸞の龍樹信仰との類似性を

明らかにすることなどは、『論註』研究に個性的な視点を見出したものであると評価されたところである。

その他、審査委員会においては大小の問題について質疑が交わされた。本論は「同時代的視野」というが、審査委員会は、さらに大きな仏教史の流れを見た上でのこの時代という視野でも議論されるべきところが残されていると指摘した。たとえばいわゆる「格義仏教」と「曇鸞浄土教」という要素はやはり何らかの考察がなされるべきであろうということ等である。

以上のように、本論文にはいくつかの不十分な点や課題が指摘され、曇鸞研究について幅広い範囲を広いままに扱ったというところはあるが、近年新たに展開している先行研究を網羅的にふまえて、それを越えたものにしたいという意欲は十分に汲み取れるものとなっており、曇鸞浄土教研究に新たな視野を提供し、学術的にも貢献する論文として一定の評価をすることができるものであることは認められた。審査委員会で不備が指摘されたところなどは、今後公刊される場合などには補われることを望むところではあるが、この研究が今後さらに充実進展する可能性を有していることは認められ、大いに期待されるところである。

以上、審査の結果、本審査委員会は、内田准心氏が龍谷大学学位規程第3条第3項に基づき、博士(文学)の学位を授与される十分な資格を有するものと認めるものである。

2016(平成28)年7月13日

主 査：深川 宣暢
副 査：川添 泰信
副 査：藤丸 要